

| | | | |
|--|--------------|---------------------|----------|
| 滋賀県栽培方式に適したイチゴ品種‘かおり野’の培養液濃度管理技術の開発 | | | |
| 【要約】イチゴ品種‘かおり野’は滋賀県栽培方式（少量土壌培地耕、無加温、無電照）下で、頂果房出蕾期以降3月上旬まで、培養液ECを0.8dS/mで管理すると、収穫始めから培養液ECを0.6dS/mに管理する場合と比べ果実糖度や果実硬度が同等で、増収する。 | | | |
| 農業技術振興センター・栽培研究部・野菜係 | | 【実施期間】平成25年度～平成27年度 | |
| 【部会】農産 | 【分野】戦略的な生産振興 | 【予算区分】県単 | 【成果分類】普及 |

【背景・ねらい】

‘かおり野’は春先の果実品質が良好で、多収性が見込まれる品種であるが、‘かおり野’を滋賀県栽培方式（少量土壌培地耕、無加温、無電照）で栽培した場合の、培養液管理方法の知見が無い。このことから‘かおり野’の生育ステージに合わせ、培養液濃度を変えることが収量と果実品質に及ぼす影響を検討し、適した培養液濃度管理技術を開発する。

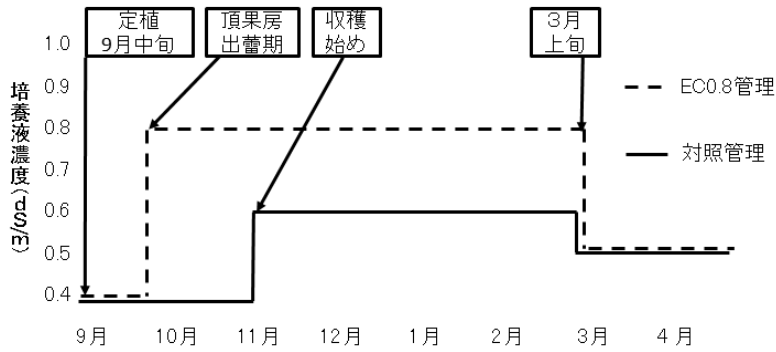
【成果の内容・特徴】

- ①2014年度は、摘果を行わず、頂果房出蕾期から、培養液濃度をEC0.9dS/mに高めた管理を行うことで、対照管理（収穫開始時期から培養液濃度をEC0.6dS/mに管理し摘果を行う、図1）と比べて上中物果数が増加し、上中物収量は34%増加した（図2）。また、排液ECは給液ECよりも高く、施肥過剰の恐れがあると考えられた。
- ②2015年度は、摘果を行い、頂果房出蕾期以降から培養液濃度をEC0.8dS/mにするEC0.8管理（図1）を行ったところ、対照管理と比べて平均果重が増加し栽培期間の上中物収量は34%増加した（図2）。また、排液ECは給液ECより低く、過剰施肥の恐れがないことからEC0.8管理が良い。
- ③摘果をしたEC0.8管理を行った場合、対照管理と比べて一次腋果房、二次腋果房ともに出蕾と収穫開始が早まり（図3）、上中物果数と平均果重が増加し、上中物収量が増加した（図4）。
- ④EC0.8管理のときの果実糖度や果実硬度は対照管理と同等である（図5）。

【成果の活用面・留意点】

- ①本成果は、給液回数を定植後～頂果房出蕾期までは2回/日、頂果房出蕾期～収穫始めまで2回/日、収穫始め～3月上旬までは1回/日、3月上旬以降は2回/日、1回の給液量は100ml/株として栽培した結果である。また、樹勢を抑えるため保温は6℃を目安に開始している。
- ②本成果は、培養液にOK-F-1を希釈したものをを用いた結果である。
- ③本成果を活用する場合は定期的に排液ECを確認し、給液ECの調節を行う。
- ④培養液濃度をEC0.8dS/mに高める時期を収穫開始時期まで遅らせると増収効果は得られない（データ略）。
- ⑤本成果は収穫終了時期を5月上旬に設定して得られた結果である。
- ⑥本成果は培養液を非循環給液した場合の成果であるが、培養液を循環給液しても同等の効果が得られている（データ略）。
- ⑦‘かおり野’は生育が旺盛で葉面積も大きくなりやすいので、排液量に注意し、排液が少ない場合は、晴天日に一時的に給液回数を1回増やす。なお、恒常的な過剰給液は、果実糖度が低下するおそれがあるので避ける。

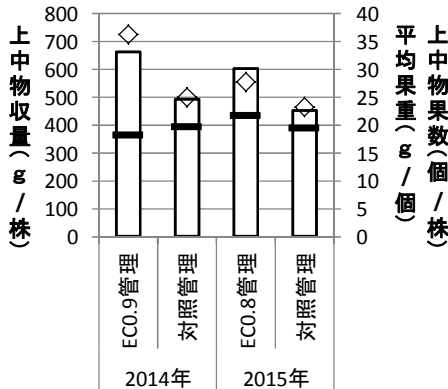
[具体的データ]



<耕種概要>

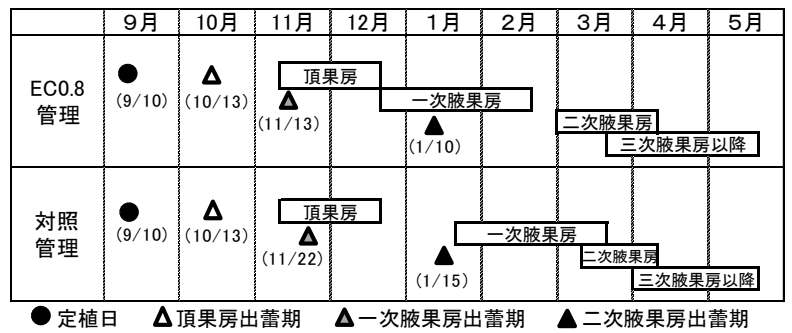
栽培には全農しが販売するイチゴ用ベンチ(発泡スチロール製)を用い、もみガラ2cm、その上に水田土壌を7cm充填した。
 栽植密度は株間23cm千鳥植え(7240株/10a)
 2014年のECO.9管理は無摘果。
 2015年のECO.8管理、2014年・2015年の対照管理は頂果房10果、一次腋果房以降7果に果数を制限した。

図1 培養液管理方法(イメージ)



□上中物収量 ◇上中物果数 —平均果重

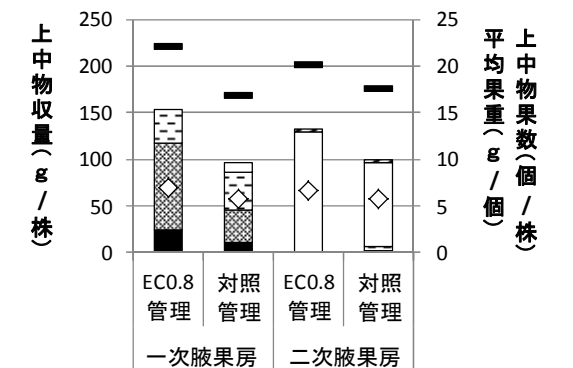
図2 栽培期間中の上中物収量



●定植日 ▲頂果房出蕾期 ▲一次腋果房出蕾期 ▲二次腋果房出蕾期

□各果房の収穫期間(0.5果/株旬以上収穫できた期間)

図3 培養液濃度管理を変えた場合の各果房出蕾期と収穫時期(2015年)



■4月 □3月 ▨2月 ▩1月 ■12月 ◇上中物果数 —平均果重

図4 果房別上中物収量(2015年)

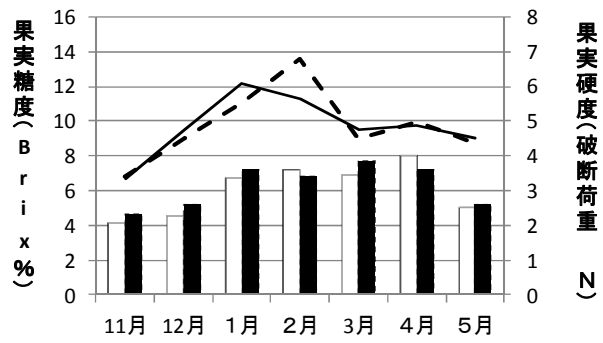


図5 果実糖度と硬度の推移(2015年)

[その他]

・研究課題名

大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名：マーケットインの視点からの野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興

小課題名：県産イチゴの生産拡大に向けた高品質・安定生産技術の開発

・研究担当者名：

野口英明 (H25~H27)、芦田安代 (H25~H27)、福永泰也 (H25)、北澤健 (H26~H27)

山下悟 (H25~H27)

・その他特記事項：

平成28年度園芸振興大会で発表